

ロシアの作家とチェチェン

— A・A・マルリンスキーの作品 (デカブリスト蜂起以前) —

藤 沼 貴

私は本論文集 (『外国語学科紀要』) 第 9 号(1999)に「ロシアの作家とチェチェン—A・S・グリボエードフの場合—」を、第 11 号(2001)には「ロシアの作家とチェチェン—A・A・マルリンスキー (ベストウージェフ) の生活—」を掲載した。その時にも述べたように、この二つの小論はもう少し大きな規模の論考の一部の準備的な素描であった。今回の小論は 11 号の論文と今後書かれるべき「ロシアの作家とチェチェン—A・A・マルリンスキーの作品 (デカブリスト蜂起以後) —」と共に、三編で一体をなすものであり、三つを併せて「ロシアの作家とチェチェン—A・A・マルリンスキー (ベストウージェフ) の場合—」と呼ぶことができる。

この小論も少数の資料によって短期間に書かれたもので、到底学術論文の域に入らないが、前二作と同様に、将来の仕事の担保として、あえて衆目にさらすことにした。

1 マルリンスキーの文学活動とその評価

マルリンスキーは 1837 年 6 月、アドラー岬での山民との戦闘で戦死し (あるいは、行方不明になり)、40 歳で創作活動をおえた。20 歳以前から創作をはじめたが、デカブリスト事件で逮捕され、流刑に処せられたため、約 5 年間文学活動が中断された。その結果、かれの活動時期は 20 年に満たない。しかし、グリボエードフ、プーシキン、レールモントフなども、デカブリスト

の詩人・作家たちも、短期間に集中的に生命を燃焼させて、立派な仕事をした。マルリンスキーも例外ではない。その作品は量的にもけっして少なくないし、さまざまな重要な意義を持っている。しかも、かれは読者に愛された作家だったし、今も読まれている。それにもかかわらず、かれの意義が正当に評価されたことはなかったと言ってよい。1825年デカブリスト蜂起までに（つまり、最初の6,7年で）、かれは批評家・作家としての人気を確立したが、評価が確定するほどの時間がなかった。それ以後は現在にいたるまで、かれの文学活動全体が正当に評価されたことはない。かれが批評家として傑出していたことは、活躍していた時期から現在にいたるまで一貫して認められているが、詩や小説などの評価はまったく一定していない。かれに好意的なベリンスキー¹⁾やパイピン²⁾でも、小説、詩などに対して客観的な評価をしているとは言いがたい。また、かれの作品は現代でもしばしば出版されており（これはかれの根強い人気を証明するものである）、「著作全集」と称されるものも二度（1837年と1847年に）出されているが、まったく不備なものでしかない。

その理由のひとつはかれの実生活での行動である。マルリンスキーはデカブリスト運動に関与し、1825年12月14日の蜂起の時にはかなり積極的に実行行為に参加した。そのため、死刑はまぬがれたものの、国家と皇帝にたいする「裏切り者」の汚名を一生背負うことになった。しかも、かれは蜂起失敗後、いち早く自首して従順に取り調べに応じたばかりか、友人たちの情報も取調官に伝えたと言われ、「二重の裏切り者」として忌避されたりした。それに加えて、1830年以降作家活動を再開してからは、体制的知識人の代表者になったF・V・ブルガーリンらに接近したため、反体制の人や後世のイデオロギッシュな文学史家からは不当に低い評価を受けることとなった。³⁾

マルリンスキーにたいする不当な評価はかれの創作そのものにも原因している。かれの作品の中でもっとも量的に多く、もっとも人気を博したのは散文小説で、とくに通俗的とみなされるような内容のものであった。後述する

ように、かれはさまざまな新しい文学的試みをしていたのだが、その点では先人のジュコフスキーやバーチュシコフのほうがはるかに目立っている。作品のリアリティ、内容の深さという点では同年輩のプーシキンや後輩のレー尔蒙トフのほうがはるかに鮮烈である。しかし、マルリンスキーの散文作品のいわゆる「通俗性」は、後述のように、文学的に意味を持っていた。百歩ゆずって、かれが通俗的な人気小説の作者にすぎなかったと認めるにしても、文集「北極星」の発行、当時のロシア文学についての時評、流刑、軍務で滞在したいろいろな場所や経験した事象についてのルポルタージュ、カフカースを題材にした小説、ロマン主義についての評論などの価値は否定できない。そして、これら全体を総括したかれの文学活動全体を客観的に研究し、その意義を正しく判断することは是非とも必要である。

この小論は当初マルリンスキーの文学活動全体を概観し、重要なポイントを簡潔に指摘する予定であった。しかし、かれの創作は実に豊富であり、数冊の著書をささげるに値するほどの内容を持っている。どれほど切り詰めても、ひとつの論文に全体を収めるのは不可能なので、今回はかれの創作活動の前半、つまりデカブリスト蜂起までを扱うにとどめた。この時期の創作はチェチェンにもカフカースにも直接の関連が少ないが、今後書かれるべきデカブリスト蜂起以後の作品についての小論の前段階として不可欠なものである。

2 文集「北極星」

マルリンスキーはK・F・ルイレーエフと共に1823, 1824, 1825の3年間にわたって、文集「北極星」を編集、発行した。1826年にも出す準備をしていたが、デカブリスト蜂起の失敗によって出版が不可能になった。アリマナフという語は、周知のように、アラビア語のal-manahに由来するもので、カレンダーを意味する。しかし、1764年パリで出された「ミューズのアルマナ」

を皮切りに、19世紀前半にわたってヨーロッパ諸国で出された近代の文学アリマナフは、広義では「文学名作選」、狭義では「年間名詩選」というほどの意味である。「北極星」の場合は年一回ずつ、詩ばかりでなく、小説、評論などをふくめて発行されたから、「年間文学名作選」と呼んでよいであろう。

この文集にマルリンスキーは次のような数多くの作品を発表した。

1823年	評	論	新旧ロシア文学概観
	小	説	ロマンとオリガ。古き物語
	小	説	露営の夜
1824年	評	論	1823年ロシア文学概観
	小	説	ノイハウゼン城。騎士物語
	小	説	七つの手紙の恋物語
1825年	評	論	1824年と1825年初頭のロシア文学概観
	小	説	レーヴェリの武術試合
	小	説	裏切り者
	小	説	血には血を

これらの作品については後で述べることにして、まずマルリンスキーがこの文集を編集・発行したいきさつとその意義を見なければなるまい。

マルリンスキーは1818年21歳の若さで総合雑誌の刊行を計画し、検閲局に許可願いを提出したが、発行人予定者が経験不足で若すぎることを理由に不許可になった。当時は定期刊行物の出版が簡単に許可されることはなかったから、この決定はむしろ当然のことと思える。「若すぎる」という不許可の理由は口実にすぎず、「却下の本当の理由はかれの政治的見解だった⁵⁾」という説もあるが、これは考えすぎであろう。1825年のデカブリスト蜂起の直前でも、かれの著作には、詩、小説、評論を通じて、政治的な発言はなく、その政治的見解を知ることはできない。⁶⁾まして、1818年にすでにかれが政治的に

不穏な人物として当局に警戒されていたということは考えられない。たしかに、マルリンスキーはデカブリストの蜂起の時に積極的な実行行為をしたが、それはかれのロマンチックな夢と正義感から発したものと考えられる。蜂起失敗後、憑き物が落ちたようにかれが後悔し、皇帝と国家に忠誠を誓ったことを卑劣な変節とみなす人は多いが、もともとかれに確固とした政治的信念はなかったと判断すべきであろう。

1824年、雑誌「祖国の子」に発表された詩「トヴェーリ公ミハイル」の中に次のような言葉がある。

屍^{いづな}を見下ろし、嘆きに命も絶えんばかりに、
若き公爵は悲痛の涙を流す。
髪を、衣服を掻きむしり、
鞭韃人、ウズベク人を呪い、
復讐の神を呼び招く…
荒ぶる神は若公に耳傾け
ロシア人^{ひと}の決起を助けて
地上から暴君たちを消し去った。⁷⁾

14世紀初頭、キプチャク汗国のウズベクハンとモスクワ大公ユーリーに惨殺されたトヴェーリ公ミハイルの悲劇をうたったこの詩句に、デカブリスト蜂起の暗示を読みとった人もいた。文学作品の解釈は自由だから、客観的な証拠がない以上、これを否定も肯定もできない。また、署名がB.... vとなっていて、長らくだれの作ともわからなかったこの詩を、1955年になってトマシェフスキーがマルリンスキーのものと判断した。たしかにB.... vはBestuzhev（ベストウージェフ）である可能性が強いし、この時期にマルリンスキーは文学の分野でも本名のベストウージェフを使っていた。私もこの一片の詩句を無視するわけではないが、言うまでもなく、作家のすべての言葉はその創作活動全体のコンテクストの中で読まれるべきで、特定の言葉だけ

を切り離して仰々しく取り上げるべきではあるまい。

「北極星」をめぐっては、さらに大幅に政治的意義に注目が向けられてきた。教科書や一般読者向けの解説では問題がまったく単純化され、デカブリスト、ロシア文学愛好者自由協会、「北極星」の三つがほとんど等符号で直結されるのが普通だった。たとえば、ソ連の文学小百科事典にはこの文集について、「明確に表現された思想的・政治的な傾向とその時代の先進的な文学的勢力をすべて結集しようとした点で、「北極星」は）デカブリスト的な方向性の定期刊行物の中で際立っている⁸⁾」と書かれている。しかし、「北極星」を一見しただけでは、一定の政治的・社会的傾向を発見することは私ばかりでなく、だれにもできないであろう。その中には、マルリンスキー、ルイレーエフなどばかりでなく、デカブリストの内部でかれらと対立していたデリヴィグやプレトニョフも、デカブリスト運動に直接参加していなかったものの、心情的な同志だったグリボエードフやプーシキンも、後に保守派とか、反動的知識人というレッテルを貼られたブルガーリンやグレーチも参加していたからである。

専門家向けの学術的な論考では、デカブリスト運動と「北極星」の付かず離れずの微妙な関係が説明されていたが、⁹⁾それでも結局は次のような定説でしめくくられていた。「デカブリストの政治運動計画の中には文学サークル、文学結社の組織がふくまれており、それにしたがって「緑のランプ」、「ロシア文学愛好者自由協会」などがつくられた。デカブリストの指導者グリーンカはロシア文学愛好者自由協会を文学・政治本部にすることを考え、その中心人物としてマルリンスキーに白羽の矢を立てた。マルリンスキーはその期待に応え、まもなくそれにルイレーエフらも協力して、「北極星」が出された¹⁰⁾」。

客観的に観察すれば、「北極星」の最大の特徴は特定の主張をはっきり出したことではなく、逆に、文学的傾向や世界観の違いにかかわらず、当時の一流、二流の文学者をひとつの文集に結集したこととだと、判断される。そ

して、この文集が異例の大成功をおさめ、ロシアのアリマナフ流行のきっかけをつくった第一の理由も、この点にある。文集のこの基本的な傾向は、毎号のトップに掲載されたマルリンスキーの時評と完全に一致している。かれは種々雑多な特徴の作家を自分の好悪の感情で選別せず、的確にその長所をとらえ、簡潔正確な表現でその価値を読者に知らせた。かれは文集の方針に則して、心にもなくそのようなことをしたのではない。その創作全体がしめしているように、博学多識、俊敏な頭脳、すべてを咀嚼できる理解力、簡明な表現力をもって、あらゆる作家や事象の特長を解き明かしたのである。

「北極星」の成功のもうひとつの原因は執筆者に原稿料を払ったことだと言われている。¹¹⁾ 文筆活動が無償の精神的行為にとどめず、一種の労力の提供とみとめて、金銭を支払う習慣は当時のロシアにはなく、この新機軸が多くの人を「北極星」に吸引した、というのは事実かもしれない。しかし、マルリンスキーの好意的な批評がなければ、当時のロシアの誇り高い知識人たちが、原稿料の魅力だけで「北極星」に結集したとは考えられない。かれがこの文集ではたした指導的批評家の役割は実に大きい。

3 評論

上記のように、マルリンスキーは「北極星」を編集・発行したばかりでなく、毎号の冒頭に文学概観・時評を載せ、「北極星」の文学的リーダーとなった。その概観・時評論文は、すでに挙げた通り、「新旧ロシア文学概観」(1823)、「1823年ロシア文学概観」(1824)、「1824年と1825年初頭のロシア文学概観」(1825)の3編である。

11号掲載の拙論で書いたように、かれはデカブリスト事件後の取調べの際に、「私が理論的、实际的に勉強しなかった学問の分野はひとつもありませんでした¹²⁾」と誇らしげに述べた。実際、かれはまれに見る勉強家で博学であり、しかも、対象の特徴をすばやく、的確にとらえ、それを要約する能力にたけ

ていた。

1823年の「北極星」創刊号に掲載された「新旧ロシア文学概観」はその長所をもっともよく発揮したものである。この論考はロシア文学の起源から現時点までのプロセスを簡潔公正にまとめたロシアで最初の文学史の試みとも言える力作で、その博覧強記と見識は読者に感銘をあたえた。ロシア文学を起源から取り扱ったものとしては、これ以前にノヴィコフの『ロシア作家歴史事典試作』(1771)、カラムジンの『ロシア作家パンテオン』(1802)、その他がある。いずれも価値のある作品だが、個々の作家についてのコメントの集成であって、通時的な軸がない。このマルリンスキーの論文はごく短いものながら、通時的な視点があり、ロシア文学史の最初の試みとみなされる。常識的には、1843年に書かれたベリンスキーの『プーシキン論』第一論文¹³⁾のロシア文学通覧が、ロシア文学史の出発点とされているが、マルリンスキーの論文はそれにちょうど20年先んじている。

マルリンスキーの評言はそれぞれの作家について数行だけの短いもので、トレジアコフスキーやスマローコフについての意見は少し厳しすぎるように、私には思えるが、大体において現代の研究者も賛成できる。たとえば、かれは18世紀の部分の叙述をフェオファン・プロコポーヴィチの説教(雄弁術)からはじめている。これはロシア近代散文の成立とロシア文学の内容の格調にかかわる事柄で、ロシア近代文学のもっとも重要な基礎のひとつである。1974年のコチェトコーワの論文¹⁴⁾などによって、このことは今では多くの人に理解されているが、マルリンスキーは1823年にすでにそれを意識していた。また、文学者のカテゴリーに入るかどうか疑わしいポポフスキーを重視し、かれがおこなった、文学的業績と言えるかどうか疑わしい、ポーブの『人間論』の翻訳の意義を重要なものとして、読者に紹介した。このこともマルリンスキーの博識と見識の高さを証明している。

かれがこの論文の18世紀の部分で取り上げたのはロモノーソフ、トレジア

コフスキーからデルジャーヴィン、カラムジンにいたる有名な作家ばかりでなく、マカーロフ、ヴォストーコフ、シャトロフなど、あまり名の知られていない者もふくまれており、このことによっても、マルリンスキーの勉強ぶりと博識が証明される。ノヴィコフ、ラジーシチェフの名が見られないのは政治的理由からであろうし、エミン、リョーフシン、チュルコフについて言及されていないのは、かれらの作品が娯楽の部類に入れられていて、文学のカテゴリーに入っていなかったからであった。19世紀前半はそれが常態だったのである。

同時代の文学を扱った部分でも、かれが言及した作家は約50人におよんでおり、当時としては、かなり多い。しかも、その一人一人について簡潔明快なコメントが加えられている。この事実は、かれの批評論文がかつての「定説」とは逆に、特定の傾向や自分の好みの主張ではなく、ロシア文学の現状の客観的で総覧的な見取り図の提示を目指していたことをしめしている。かれのこの基本的姿勢は次号の「1823年ロシア文学概観」にも、その次の「1824年と1825年初頭のロシア文学概観」にも受け継がれている。

この時代のロシアでは出版物であからさまに反体制的な意見を述べることはできなかつたから、マルリンスキーも「イソップ的言語」（寓意をふくむ表現）で語っていたのだ、と言われてきたし、¹⁵⁾それは原則的に正しい。しかし、その具体的な例は「新旧ロシア文学概観」には見当たらない。「1823年ロシア文学概観」からの例は次の部分である。

「遙かな戦闘の雷鳴が作家の文体を生气づけ、散漫だった読者の注意に活を入れる。新聞が雑誌や著書に変わり、探究心は高まり、現存するものに満足しない想像力は虚構を渴望し、政治的刻印をつけて文学が社会をかけめぐる」

この「遙かな戦闘の雷鳴」という言葉は、当時イタリアを中心に活動していた革命勢力カルボナリ（炭焼き党）や1823年に敗北したスペインのリエ

ゴ・イ・ヌニエスの革命運動をロシアのデカブリスト運動に結びつけている、というのが、マルリンスキーの「イソップ的言語」の謎解きである。だが、上掲の語句は「昔、学問は消えゆく戦争の雷鳴の中でその光明をともし、雄弁の花は平和なオリーブの葉陰で育った。学者と軍人の立場がもはやひとつの線に融合しない現代、われわれはまったく逆のものを目の当たりに見ている。地形学者や古美術研究者は軍旗のもとで発見を検証するのである」という言葉のすぐ後に書かれているものである。それは学芸が政治、社会的事件に直接影響され、それから刺激を受けている新しい時代の特徴を、一般論として述べたものと受け取れる。また、引用された言葉のすぐ後には、「このようなことは祖国戦争の時にわれわれにも起こった」という文がつづいており、1812年のナポレン戦争中のロシア人の精神的高揚に結びつけられているのである。

この中にデカブリストとの結びつきを、ましてその政治的信念の主張を感じとることは、当時でも、普通の読者は容易にできなかつたであろう。寓意は、まさにイソップの作品のように、多くの普通の読者が一読して推察できるものでなければなるまい。

「北極星」に掲載されたマルリンスキーの評論にすでにロマン主義の明確な主張があるように言っている論者は多すぎて、その例を挙げることもできないほどである。だが、実は、この時期のかれの論文には明確な政治的主張ばかりでなく、ロマン主義の優位や意義を主張した言辭もない。かれの有名な論文「ロマン主義について」は1839年に発表されたものである。このことはいわゆる「デカブリスト文学」とロマン主義との関係にもかかわる大きな問題だが、本論では扱わないことにし、後日、マルリンスキー自身のロマン主義について述べるときに、まとめて論じることにしてしよう。

もう一度繰り返していえば、マルリンスキーのこの時期の評論の特長は、特定の主義や傾向を主張したことなく、博覧強記と的確な判断を武器に

して、客観的に広くロシア文学の過去と現状をしめしたことにある。この時期のロシアに文学研究、文芸学などの分野は実質的に存在していなかったが、もしかかれが20年、いや10年遅く生まれていたら、ロシアの文学史や文学研究の祖になった可能性がある。かれの評論はそのような性格を持っているのである。

その反面、かれが1825年の事件にめぐり会わず、そのまま雑誌やアリマナフで評論活動を続けていたにしても、ノヴィコフやカラムジン、ポレヴオイやネクラソフのようなすぐれたジャーナリストになったかどうかは疑わしい。マルリンスキーは現象の観察、認識、その結果の叙述にかけては非凡な能力を持っており、今挙げたノヴィコフなどの傑出した人々に勝るとも劣らない。しかし、現象の奥に潜在しているものを洞察したり、その現象が生じた原因をえぐり出したり、その今後の成り行きを見通したりする点では、明らかに劣っていた。その例をひとつだけ挙げよう。

「新旧ロシア文学概観」でかれはロシア文学の過去と現状を一覧した後で、独自性のある作家、しっかりした作品がロシアには少ないことを指摘し、その原因として、次の点を指摘している。

- i 国土の広さから生じた教育機関や教員の不足。その結果としての啓蒙の遅れ。

この遅れは貴族の封建的な考え方、ペテルブルグ、モスクワの俗悪な生活によって、いつそう悪化している。

- ii 作家の努力不足。その原因は柔軟性のない流派の結成、一般の意見に耳を傾けず、追従だけを聞く作家の独善にある。それでいながら、作家は自分の作品が人気を得ないと、目先の評判だけを求めて、未来の月桂冠より今のケシの花をえらぶ。

- iii ロシア語の軽視。とくに、ロシア語で書かれたものに対する女性の無関心。

この説明はこれまでの見事な叙述にくらべて、あまりにも平凡で核心をついていない。また、あとの二つの時評は現象の概観だけで、総括的な結論はない。「1824年と1825年初頭のロシア文学概観」の末尾を筆者マルリンスキーは「私は自分の読者と論争するというよくない方法を選んだ……しかし、どんなかたちにしろ、私は考えていることを言ったのだ」という言葉で結んでいるが、読者を反発させるようなきびしい意見はこの論文ばかりでなく、一般にかれの論文にはない。¹⁶⁾ かれの論文は冷静で、妥当な情報を提供することで、読者に感謝されたのである。

4-0 散文作品

マルリンスキーは批評家として目ざましい成功をおさめたが、小説を主とする散文作品でも大きな人気を博した。かれの散文作品は批評論文の場合と違い、その評価がさまざまで、個々の作品も十分に分析されていない。ソ連の代表的な文学研究者の一人だったF・Z・カヌーノワは1973年に、マルリンスキーの散文作品の研究史を概観した。そして、その結果、これまでにもある程度の研究成果はあるものの、いまだに研究の余地が多く残されており、かれの散文作品がなぜ大人気を博したのか、ロシアの散文に何をあたえ、リアリズム散文の発展にどうつながるのか、といった問題さえ説明されていないことを指摘した。¹⁷⁾ それから30年たった今も、この状況はあまり変化していない。1995年アメリカのL. バグビーが著書『アレクサンドル・ベストウージェフとロシアのバイロニズム』¹⁸⁾ を出版した。私にはこの著者の視点、分析の方法、判断の多くが納得できないが、この30年間のロシア人学者の研究の中に、この労作以上に興味をそそるものを、私は発見できなかった。そして、この本はロシア語に翻訳され、ロシア人研究者にも利用されているのである。

この小論では、もちろん、かれの散文作品を多少ともくわしく検討するこ

とは不可能なので、多くの問題を割愛し、マルリンスキーの散文小説がロシア散文小説の通時的な流れの中で、どのような位置を占め、どのような役割をはたしたかという一点にしぼって、略説することにしよう。

デカブリスト蜂起までにマルリンスキーが創作・発表した散文小説は十数編あるが、その主要なものを種類別にまとめると、次のようになる。

i 歴史小説

a ロシア史から題材をとったもの

ロマンとオリガ。古き物語

裏切り者

b バルト諸国の歴史から題材をとったもの

ウェンデン城。近衛士官の日記断章

ノイハウゼン城。騎士物語

レーヴェリの武術試合

ii 現代小説

a 恋愛小説

船上の一夜

七つの手紙の恋物語

b 戦場小説

カフカースでのオヴェーチキンとシチェルビーナの勲功

c オムニバス形式の小説

露営の夜

露営の第二夜

4-1 歴史小説

1825年までのマルリンスキーの小説の中では、歴史小説がもっとも大きな比重を占めている。しかし、私のとぼしい知識の範囲では、これらの作品を

克明に検討した研究は上記のバグビーの著書以外にない。ベリンスキーはマルリンスキーの批評論文を高く評価し、その小説も一方で価値を認めながら、他方では「芸術ではなく、単に文学に属するもの」と切って捨てている。¹⁹⁾ カヌーノワはいつも自分の専門である美学論の見地から文学を考察しているので、もともと具体的な分析を期待することは無理である。事典・教科書レベルでは、マルリンスキーの小説の第一の特徴がシュトゥルム・ウント・ドラングとの結びつきであるかのように解説しているものさえあり、²⁰⁾ はたして筆者はマルリンスキーの作品を読んでいるのかと疑いたくさえなる。

マルリンスキーの歴史小説のもっとも重要な特徴のひとつは、一見、なんの変哲もない、独自性のとぼしいものに見えながら、実は、ロシアの歴史小説の前例をほとんど拒否し、独自の型を創り出したことにある。

かれにとって直接先行するロシアの歴史小説は言うまでもなく、カラムジンの二つの作品、『貴族の娘ナターリア』(1792)と『太守の妻マルファ』(1803)である。もちろん、マルリンスキーはこの二つの作品を読んでいたばかりでなく、それが新しいロシアの歴史小説の基盤であることを熟知したはずである。当時のロシアで、このことは文学にたずさわる者ばかりでなく、知識人の常識であった。しかし、かれはカラムジンの例にならおうとしなかった。かれは『貴族の娘ナターリア』のように、歴史小説の中にセンチメンタリズム特有の情緒を持ちこまなかったし、『太守の妻マルファ』のように人間の心ココロを主軸にする方法をとらず、ヒロイズム、騎士精神など、一般的な観念の表現を優位においた。マルリンスキーは歴史上の人物の政治的行為を描いても、個人の恋愛を描いても、物語の筋とそれによってしめされるイデーを優先させ、個人の心に深入りしなかった。

マルリンスキーの小説は観念的だとか、心理描写が不十分だといった批判が多いが、それこそがかれの作品の特徴なのである。「小説は観念的であってはならない」とか、「小説には十分な心理描写がなければならぬ」などという

のは主観的な判断にすぎず、一般的な通則にはなりえない。また、マルリンスキーが「読者よ！」などと呼びかけること、一般に、作者の声を響かせることを避け、客観的な叙述をつらぬこうとしたことも、かれの重要な特徴である。

カラムジン以外のロシアの歴史小説の前例としては、フォークロアを源泉とするものがある。とくに、フォークロアを源泉としたM・D・チュルコフの物語集『からかい屋、またはスラブ昔話』(1766-1788)は5編からなる大労作で、大きな人気を博した。マルリンスキーはこの存在を知っていたはずだが、この流れにもつながらなかった。前述のように、当時チュルコフたちの作品は文学とはみなされていなかったもので、マルリンスキーもそれを重視しなかったのかもしれない。²¹⁾しかし、かれはイマジネーションによるフィクションを駆使していた反面、ファンタジーは創作にとりいれなかった。ファンタスティックな面を本質的な要素として持つフォークロアが、かれの歴史小説の素材にならなかった第一の理由は、こうしたかれの創作原理にあると考えるべきであろう。かれの歴史小説は年代記のような歴史資料によったもの、あるいは、よっていると思わせる装いをもったものでなければならなかった。

このようなファンタジーとフォークロアの拒否は、先輩のジュコフスキーがファンタジーを重視したこと、またマルリンスキーと同じ時期に、プーシキンがファンタスティックなフォークロアと密接に結びついた『ルスランとリュドミーラ』(1820)で、本格的な文学活動に入ったのとは大きく異なっている。

また、マルリンスキーは17世紀以降ロシアに現れた「モスクワ発祥の物語」や「トヴェーリ・オートロチ修道院縁起物語」のような年代記の物語化にも無縁だった。²²⁾年代記の一行か二行の記述をファンタジーによって膨張させ、しかも、それを獵奇的な物語に仕立てることは、やはりかれの創作原理に反するものであった。

このように、どの型にも属さないマルリンスキーの歴史小説の特徴は、国家や民族の歴史的な動きの重視、個人的感情への没入の抑制、第三者的な叙述方法などだと言える。かれが批評論文で見せた博識と判断力を考えると、この選択が直感によるものや、まして、無意識によるものだったとは考えられない。

4-2 現代小説

この時期のマルリンスキーの現代小説は歴史小説と比べ量的にはるかに少なく、その3分の1くらいでしかない。しかも、秀作といえるほどのものはない。だが、その全容は豊富で多様であり、それを通じて、かれの文学的姿勢とロシア文学の中で占める位置を知ることができる。

上掲の二つの恋愛小説「船上の一夜」と「七つの手紙の恋物語」は両方とも悲恋小説である。

前者では、スコットランドの海軍士官ロナルドが愛するメリーを命がけで海難事故から救う。しかし、ロンドンに帰国後、上流社会でもてはやされはじめたかの女に冷たくされ、悲しくスペインに去る。やがてメリーは上流社会で人気を失い、ロナルドを思い出す。かれはそれを知って、イギリスにもどるが、かれが到着したちょうどその時、病死したメリーの葬儀が行われていた。

後者では、ある男が恋をし、幸福に酔い、恋敵に恋人をうばわれ、そのライバルを殺して獄につながれる。わずか4カ月ほどの間に起きたこのドラマが、その男の7通の手紙だけで伝えられる。

このような悲恋をテーマとした作品は古今東西に無数にある。悲恋小説は文学作品の中でもっとも数の多いものであり、フォークロアにも悲恋の説話、物語、伝説は数多くある。ロシアの場合も、マルリンスキーの作品に先行するものとして、カラムジンの『エヴゲーニーとユーリア』(1789)や『あわれ

なりーザ』(1792)を、われわれは容易に思い出すことができる。このカラムジンの二作は周知のように、ルソー、ゲーテ、リチャードソンなどの西欧の近代小説にならいながら、内外のフォークロアの伝統もふまえて作られた作品である。実に単純素朴な作品だが、ロシアの土壤に据えられたロシア悲恋小説の、そして、ロシアの近代小説の基盤であった。カラムジンがささやかな作品にすぎない『エヴゲーニーとユーリア』に「ロシアの真実の物語」という副題をつけたのはけっして誇張ではない。

カラムジンの基礎造りからマルリンスキーの時代まで 30 年もの時間が過ぎていた。当時のロシアにとって 30 年は一世代ではなく、一世紀ほどの大きな時間幅であった。しかし、この間のロシアにおける悲恋小説を調べてみると、意外なことに発展はほとんど見当たらない。カラムジン自身は個性の微弱なロシアで個人レベルの「心」に深入りしてしまうと、卑小なものに突き当たることを予測して、『あわれなりーザ』の線を発展させようとしなかった。かれは『ボルンホルム島』(1794)、『シエラ・モレナ』(1795)などでロマン主義の線を試み、さらに、『わが懺悔』(1892)、『情の人、冷たい人』(1803)、『現代の騎士』(1803)ではリアリスティックな小説も試みた。しかし、これらの流れにも深入りすることなく、歴史執筆に転じ、民族の「^{スピリット}心」を探求しはじめた。この結果、『あわれなりーザ』の線には、カラムジンの亜流だけが残ることになった。

マルリンスキーは全体的にセンチメンタリズムとは明らかに一線を画しているが、「船上の一夜」も「七つの手紙の恋物語」も、テーマ、形式とも『あわれなりーザ』に似ていながら、別種の作品であった。両作品とも、第一に、その主要素は個人の感情ではなく、「運命の力」であった。しかも、かれは人間の敗北が予定されている、古典的な運命と人間の闘いを描こうとしたのではなく、ロマン主義的な運命の壮絶な暴威を描こうとしたのではなく、運命には従うべきだとか、運命は克服できるとかいった教訓を説こうとしたので

もない。マルリンスキーの「運命の力」は、いわば、折衷的であった。つまり、かれは人間が運命の支配下にあることをしめすと同時に、運命を誇張も軽視もせず、等身大で描いたのである。

「カフカースでのオヴェーチキンとシチェルビーナの勲功」はカフカースの戦場で奮戦した（前者は生き残って恩賞を受けたが、後者は戦死した）二人の勇士の話である。マルリンスキーがカフカースの戦争に取材した作品は、ロシア将兵の活躍を誇張し、美化した、悪い意味でロマンチックな作品だという「定説」²³⁾がある。自分でもカフカースの戦争小説を書いたレフ・トルストイは、カフカースで戦っている将校たちの中には、「現実と矛盾する」マルリンスキーの作品のヒーローたちの「プリズムでカフカースを見ている」²⁴⁾者がいたと言った。しかし、このトルストイの言葉こそが事実と矛盾する偏見であった。トルストイは天才的な芸術家の常として、他人の作品を注意深く見ていなかったのである。

マルリンスキーのいわゆるカフカース物「カフカースでのオヴェーチキンとシチェルビーナの勲功」には、全体として、過度のロマンティシズムはない。この作品の場合、主人公は二人とも一介の将校であって、王侯でも騎士でもない。冒険的な筋もなく、美女も登場しない。現代の現実の中に現れたささやかなヒーローの話である。前掲の一覧の中で私はこの作品を「戦場小説」と名づけた。もしこれがもう少しロマンチックな小説であったら、「現代英雄小説」という呼び名を使うこともできたであろう。しかし、この作品はそのような大げさな名がふさわしくない種類のものである。（この作品には1825年の初出版と1834年の著作集版があり、厳密な議論をするためには、まず両者の比較をしなければならないが、ここではそのような細部には立ち入らないことにした）。

この小説は崇高な英雄的行為の場を中世の騎士世界から現代の現実に移して、変換しようとしたものである。しかも、マルリンスキーはそれをパロ

ディ化するのではなく、崇高なものを現代に再現しようとした。これもしばしばロマン主義という抽象的な言葉で片づけられているマルリンスキーの創作原理の重要な点である。

現代の現実にもかかわろうとするマルリンスキーの試みはさらに進んで、卑小なもの、コミックなもの、日常の些事にまで及んだ。「露営の夜」、「露営の第二夜」はその試みの現われで、小品ながら興味の尽きない作品である。前者では二つ、後者では三つの^{アネクドート}小話が作品の内容のすべてである。ひとつずつ切り離せば軽妙な短編小説になるものを、マルリンスキーはオムニバス形式で一作にまとめ、しかも、作者が直接に語らず、露営の軍人に順々に語らせた。それは自らの現実への進入をあまりに急激なものにして、作家としての自分を未知の危険にさらすのを恐れたためかもしれない。

こうして、「カフカースでのオヴェーチキンとシチェルビーナの勲功」、「露営の夜」、「露営の第二夜」の三作を先入観なしに単純に観察してみると、マルリンスキーもまたカラムジンやプーシキンと同じように、自分が到達した地点にほとんど立ち止まることなく、質の違う新しい領域にたえず踏みこんでいることがわかる。そして、1806年に文学創作をやめ、歴史執筆に専心したカラムジンと、1830年代から散文小説を書きはじめたプーシキン、ゴゴリの間であって、マルリンスキーがロシア近代散文小説の形成に大きな役割をはたしていたこともわかってくる。ベリンスキーがマルリンスキーを「ロシア散文のプーシキン²⁵⁾」と呼んだのも当然だったのである。

しかし、この興味深い問題には、今後マルリンスキーの創作の後半を論じる機会があったら、その時にふたたび立ち返ることにしよう。

注

1) Белинский В. Г. Полное собрание сочинений А. Марлинского. //

Полное собрание сочинений В. Г. Белинского. М., 1954. Т.IV, С.21—53

- 2) Пыпин А. Н. История русской литературы. СПб., 1903. Т.IV, С.21—53
- 3) この例は列挙できないほど多い。もっとも典型的な例は、これまでで最大のロシア文学史 История русской литературы АН СССР в 10-и томах. М.-Л., 1952. Т.IV. で、二流の作家・詩人まで独立した節で論じられているのに、マルリンスキーには独立した節があたえられていないことである。
- 4) 「北極星」の原書を見ることは現在では比較的容易だが、テキストとしては Литературные памятники シリーズの次の版を使うのが普通。Полярная звезда. Изданная А. Бестужевым и К. Рылеевым. М.-Л., 1960.
- 5) 上掲書. С.807.
- 6) このような見方は革命以前ではむしろ普通であった。たとえば：Котляревский Н.А. Декабристы; кн.А.И.Одоевский и А.А. Бестужев-Марлинский; их жизнь и литературная деятельность. СПб., 1907. С.122.
- 7) ここでは次のテキストによった。Бестужев-Марлинский А.А. Сочинения в двух томах. М., 1958. Т.2, С.477—478.
- 8) Краткая литературная энциклопедия. М., 1968. Т.5, С.873, лев.
- 9) たとえば、前掲の Полярная звезда. Изданная А. Бестужевым и К. Рылеевым. М.-Л. 1960. С.808—820.や История русской литературы АН СССР в 10-и томах. М.-Л., 1952. Т.IV, С.21—41.など。
- 10) Полярная звезда.С.809.
- 11) Там же. С.811.
- 12) Мейлах Б.С. Декабристская идея национального возрождения и русская культура начала века. Декабристы и русская культура. Л., 1975. С.8.
- 13) Белинский В. Г. Ук. кн.1954. Т.VII, С.99-131
- 14) Кочеткова Н.Д. Ораторская проза Феофана Прокоповича и пути формирования литературы классицизма.//сб. XVIII. Л., 1974. №9, С.50-80
- 15) История русской критики. М.-Л., 1958, С.197.
- 16) Белинский В.Г. Ук. кн. Т.IV, С.30.
- 17) Канунова Ф.З. Эстетика русской романтической повести. Томск, 1973. С.4—8.
- 18) Bagby L. Alexander Bestuzhev-Marlinsky and Russian Byronism. Pennsylvania, 1995.
- 19) Белинский В.Г. Ук. кн. Т.IV, С.35.
- 20) たとえば：Энциклопедический словарь Ф.А. Брокгауза-И.А. Эфрона.1891.

T.6, C.621, пр.

- 21) この項のロシア小説の流れについては、cf. Сиповский В.В. Очерки из истории русского романа. СПб., 1909—1910, Т.1, Вып.1-2.
- 22) 藤沼 貴 ロシア文学における歴史小説——その前史とカラムジン、プーシキン、トルストイ//岩波講座「文学」。2002, 第9巻、106 ページ。
- 23) Базанов Б. Очерки декабристской литературы. М., 1953.では、ソ連時代になってそのような偏見がなくなった、と主張されているが、私見によれば、その後も強く残っている。
- 24) Толстой Л.Н. Полное собрание сочинений. М., 1935 Т.3, С.232
- 25) Белинский В.Г. Ук. кн. Т.IV, С.28.